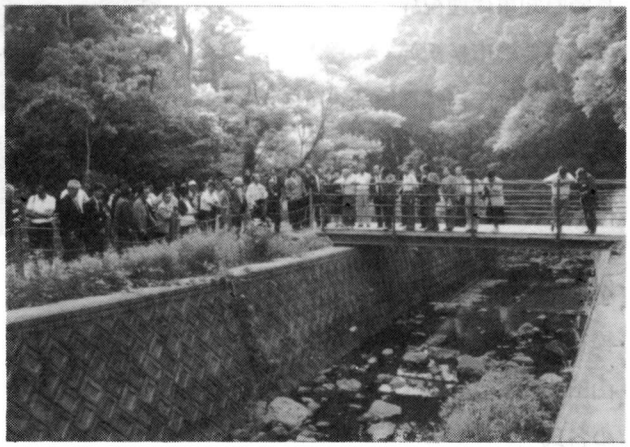
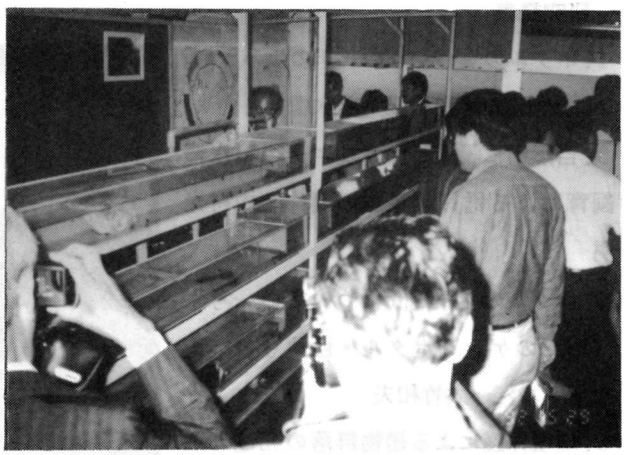
全国ホタル研究会第25回研究大会の報告

全国ホタル研究会第25回研究大会が1992年５月29日～31日に長崎市で開催されました。

全国各地から多くの方々が参加され、以下の日程で、熱心に討論や情報交換なされるとともに、親睦を深められ実りのある大会となりました。今大会を開催されました長崎の伊良林小学校ホタルの会の皆様には感謝いたします。





29日

15：00－16：30　受付（各自食事をとりシティーホテルに集合）

17：00－18：30　伊良林小学校ホタルの会が用意してくださいました、タクシーで「ふるさといきものの里」御手洗川見学

18：00－20：10　伊良林小学校で飼育されているゲンジボタルを見学　昭和57年７月23日の長崎水害で亡くなられた10人の方の、水害慰霊会を、伊良林小学校で児童と一緒に行いました。

慰霊祭　冨工伊良林小学校ホタルの会会長開会の辞

有谷悟伊良林小学校長挨拶

長崎市教育委員会指導部長挨拶

村上全国ホタル研究会会長挨拶

飼育委員会発表

黙祷

ホタルの放遊

伊良林小学校ホタルの会が用意して下さいました、タクシーにて宿舎の長崎シティーホテルに戻りました。

20：30－21：30　座談会（シティーホテルにて）

30日　　大会・総会・懇親会

9：00　高塚明則伊良林小学校ホタルの会前会長開会宣言

村上会長挨拶

長崎県知事代理祝辞

本島等長崎市長祝辞

高橋進環境庁自然環境調査室長メッセージ

祝電披露　植村司郎全国ホタル研究会幹事

金子原二郎衆議院議員

松谷蒼一郎元建設省住宅局長

山田マサヒコ弁護士

の各氏

研究発表

1．ホタルの里づくりの10年の歩み　傳寛

2．子供達の活動状況　白水聡

3．自然川に設置したカワニナの篭水槽飼育による稚貝収集器の制作　中村光男

4．ホタルの発生期間についての一考察《沼津のゲンジボタル・西伊豆のヘイケボタル》　大竹和夫

5．環境保護による植物群落の発達と生態系の構築（江津湖湧水域及び八景水

谷研究水域の整備）　小林修

6.北海道釧路湿原のヘイケボタル　大場信義・圓谷哲男

7.ホタル発光パターン　鈴木浩文

8.ホタルから自然保護へ　宮下衛

9.宮城県内のゲンジボタル天然記念物の現況　浅田義邦

室内飼育（小器）の成果　浅田義邦

シンポジウム（午後）

「ホタルを通しての教育」　伊良林小学校ほか

コーディネイター　伊良林小学校ホタルの会会長　冨工妙子氏

パネリスト　伊良林小学校教諭　近藤悠雄氏、加治木小学校教諭　上野武次氏、小倉南養護学校教諭　中村光男氏、豊田市立西広瀬小学校教諭　鈴川喜代子氏

総　会

15：00－16：00　長崎シティーホテルで総会がおこなわれた。

1.議長として西尾秋雄会員が選出された。

2.事業並びに会計報告がなされ、承認された。

3.全国ホタル研究会第26回大会地は沼津に決定された。

4.第27回大会の開催地については大会開催希望地が複数となり、今後の開催地の決め方を検討するために、今年応募されたが開催地の選にもれた、希望地より今年に限り、第27回の開催地を幹事会で決定する。

5.全国ホタル研究会がより活動的になるために、支部制等の組織の改編について幹事会に於て検討することが了承された。

6.「日本ホタルの会」の支援に付いて、全国ホタル研究会としては全面的に支援をすることが承認された。また「日本ホタルの会」との調整等については、大場副会長と圓谷事務局長に全権がゆだねられたが、総会で承認された。

閉会

懇親会

18：00－20：30　懇親会が長崎シティーホテルで、行われました。

31日

9：00－12：00　長崎市内見学は、伊良林ホタルの会が用意して下さいましたバスにより平和記念像・大浦天主堂・グラバー邸等見学し解散しました。

全国ホタル研究会第25回研究大会

祝辞

日時　平成４年５月30日

場所　長崎シティーホテル

開会にあたりまして、一言お祝いのことばを申し上げます。

全国ホタル研究会におかれましては、25年の永きにわたり、ホタルを通した自然保護の実践や、啓蒙普及に貢献されてまいりましたことに対しまして、心から敬意を表する次第でございます。

さて、最近におきましては、身近なところでは、生活様式などから交通騒音や生活排水による水質汚濁などの都市生活型の公害問題が顕在化しております。

また、一方では、温暖化、オゾン層の破壊や熱帯林の減少などの地球的規模の環境問題が年々深刻になってきております。

６月３日からは、地球の裏側のブラジルで世界の元首が一堂に会して、地球サミットが行われますが、前夜祭ともいえるこのような時期に記念すべき25回目の大会が、ここ長崎の地で開催されますことは誠に時宜をえたものであり、関係各位の御努力に感謝を申し上げます。

地元のホタル愛好家の皆様方におかれましても、ホタルを通して自然保護のため、日頃からご尽力いただいていることに対し、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

特に、伊良林小学校におかれましては、さる５月12日に、日本鳥獣保護連盟会長褒状を受賞されました。

これもひとえに、57年の長崎大水害により犠牲になられた児童及び保護者の方10人の慰霊のためと、当時の荒れた中島川の自然を取り戻すことを契機として活動を決意され、今日までホタルの幼虫とカワニナの放流を続けてこられたたまものであります。とりわけ、伊良林小学校ホタルの会や学校当局の御努力に対しましては、深く感謝申し上げます。

県といたしましても、「人と自然の共生する環境保全社会をめざして」を念頭におきながら、「美しいふるさとづくり」に向けて、環境保全行政に最大の努力をしていく所存でございます。

会場の皆様方におかれましても、今後ともなお一層の御活躍と御健勝を祈念いたしまして、簡単ではございますがごあいさつといたします

平成４年５月30日

長崎県知事　髙田　勇

祝辞

長崎市長　本島　等

本日ここに、第25回全国ホタル研究長崎大会が開催されるに当り、一言お祝いを申し上げる機会を得ましたことは、私の深く喜びとするところであります。

日頃から「美しい水辺を求め、ホタルの里づくり」を目指し、幼虫の放流やカワニナの育成等を通じて、自然環境保護運動に精力的にご活躍されている皆様な心から敬意を表するものであります。

近年の急激な都市化や生活様式の多様化などで、水辺環境の変化が著しく、ホタルの生息地が限定されていく状況の中で、自然環境に対する住民意識の高まりに即応して、各地での熱心な保護活動が実り、再びホタルが住めるホタルが住める水辺環境に戻りつつあることは、大変喜ばしいことと思っております。

言うまでもなく、ホタルの生息には清らかな水と緑が不可欠であり、長期的な対策のもとに自然環境を守り育てることが必要になりますが、そのことが、私たち人間が求める快適な生活環境づくりであり、究極的には人間性の回復につながっていくものであると考えます。

本市におきましては、昭和57年７月の大水害により、ホタルの生息地は壊滅的とまでいえる、状況におかれましたが、伊良林小学校ホタルの会を始め各地での地道な活動が実り、初夏の夜に再びホタルが飛び交う姿が見られるようになりました。

はからずも、伊良林小学校ホタルの会におきましては、創立10周年の記念すべき年に当っております。このような状況のなか、当地で第25回全国ホタル研究大会が開催されますことは、誠に時宜を得たものであり、本市におけるホタル保護運動はもちろん、広く市民の自然環境の保全に対する関心を高めて行くうえでも、おおいに資するものと存じます。市内には、シーボルト記念館をはじめグラバー園や崇福寺、眼鏡橋など多くの名所旧跡がございますので、せっかくの機会を生かされ初夏の長崎を散策していただきますよう、ご案内申しあげます。

おわりに、この意義深い大会を契機として、全国の自然保護運動が更に発展することを祈念し、あわせて、皆様方のご健勝をお祈りいたしまして、お祝いと歓迎のご挨拶といたします。

メッセージ

高橋　進　（環境庁自然環境調査室長）

第25回ホタル研究大会開催おめでとうございます。

地球規模での環境問題が注目されている昨今ですが、これとは裏腹に身近な生活環境の悪化が懸念されているのも実状です。

全国のボランティアの皆様にご協力いただき、環境庁が実施した緑の国勢調査「身近な生きもの調査」の結果でも、良好な自然環境の指標であるホタルの生息域の縮小が懸念されております。

会員の皆様の永年にわたる研究・保護活動を通じて、ホタルの保護のみならず、身近な自然環境保全のネットワークが着実に広がって行くことを期待しております。

最後になりますが、全国ホタル研究会の益々のご発展と会員皆様のご健勝をお祈りします。

1992年５月30日

シンポジウム『ホタルを通しての教育』の（要旨一部）

きれいな水とホタルの学校

豊田市立西広瀬小学校

1.学校紹介

西広瀬小学校は、自動車産業が盛んな愛知県豊田市の北東部にあり、目の前を矢作川が流れる全校児童54名という小さな学校である。

高度成長期の昭和40年代後半、矢作川の水はミルク色に濁り、岸にはヘドロが堆積する荒れた川になっていた。昭和47年には上流で集中豪雨があり、復旧工事による泥水も流れこんでいた。西広瀬小の児童は、矢作川の支流のひとつである飯野川で川遊びをしていたが、その飯野川も年々きたなくなり、水遊びの子どもの歓声も減っていた。“昔のように遊べる川にしたい”という子どもたちの願いが児童会で真剣に話し合われ、飯野川の清掃が始まり18年になる。

また、矢作川の清流を守る「小さな見張り番」として、矢作川の透明度を測る水質汚濁調査が昭和51年7月3日より開始された。雨の日も雪の日も、日曜日も正月も休む事なく続けてまもなく六千日を迎えようとしている。そして今、矢作川に清流とアユがもどってきた。

2.本校の源氏ボタルの飼育について

もう一つ忘れてはならないのが源氏ボタルの飼育である。

消毒や耕地整理のために、いつの間にか見られなくなってしまった夏の風物詩であるホタル…本校は今では大きなロマンとなった「ホタルの飛びかうふる里」づくりに取り組み、源氏ボタルを飼育・放流して17年の歳月を積み重ねている。ここで本校のホタルごよみを紹介しよう。

本校では、高学年が交代で水質当番の仕事をしているが、その児童が6月下旬よりのホタル当番の仕事を兼ねることになっている。

3.ホタルを通しての自然教育について

先に述べたように、本校ではホタルの飼育だけでなく、飯野川清掃・水質汚濁調査など自然愛護活動に取り組んでおり、その活動は地元の広報紙をはじめ、新聞・テレビなどで全国に紹介され、また5年生の社会の教科書にも取りあげられち。おおくの人に励まされてこれまで継続できたのである。ホタルの飼育もこれらの活動と切り離して考えることはできない。

児童が源氏ボタルを大切に育ててきていちばん感動するのは、ホタル鑑賞会で源氏ボタルがボーと光りながら飛んだり木に止まっている姿を見た時である。その時の感動は、何ものにもかえがたいものであるし、たくさんの光が見られるほど、苦労も報われたという気持ちが大きい。

本校の児童は、これらの活動を通して、自然を大切にするということに関しては他地域の児童よりも関心が深いものと思う。ただ、ホタルに関しては、例えば放流しようとする時、源氏ボタルの天敵といわれるクモを発見した子どもたちはクモを殺そうとする。ホタルは、自分たちが大切に育ててきたのだから生かしたい。しかし、害になる生き物なら簡単に殺してもいいのか…そこのとこ

月	日	源氏ボタルに関わる活動
4 5	初旬～13日ころ 中旬	・児童会は放流集会の計画、準備 ・放流集会にて、ホタルクイズをした後、ホタルの幼虫を小川に放流（前日に高学年がホタル池で源氏ボタルの幼虫を採集　50～150個体ほど） ・ホタル池のカワニナを採集後、ホタル池の清掃 ・カワニナをホタル池に戻す（カワニナの餌は、みそおじやを天日で乾燥固めたもので、源氏ボタル飼育開始当時から勤務している公務手さんが毎年作る。週に1度与える。
6	初旬～中旬 16～19日ころ 下旬	・ホタルの姿をホタル池にて観察できる ・放流した桐ケ洞に、風のない暗く蒸し暑い日を選び下見に行く。 ホタル観賞会（高学年全員と、在校生・父兄の希望者が参加）この時、高学年は源氏ボタルを採集 ・個体数が足りないときは教師が採集する ・源氏ボタルに卵を産ませる、ホタル日誌をつけ始める （高学年はホタル当番の仕事が始まる）
7 8 9	初旬～	・孵化した幼虫が水を入れたバットに落ちる 当番児童は酸素と水と石を入れた水盤にホタルの幼虫をスポイドなどで移す ・当番児童はホタル池からホタルの大きさにあったカワニナを採集してきて、幼虫に与える
10 11 ～		・ホタル池に幼虫を放流する（ホタル当番の仕事終わり） ・以後は時々ホタル池を児童・教師とも巡回する

ろを子どもたちに教えるのはむずかしい。本校では、児童数が年々減少している。そのため、将来どのようにしてこれらの自然愛護活動を推し進めて行くかということが問題になる。また、教職員の後継者を育てる必要があるが、やっとホタル飼育のサイクルがわかったところで転勤ということになりかねず、深まらない。できれば、今回見学させていただいた伊良林小学校のように、地域の人々のなかに指導者がいて地域ぐるみでホタルを育てるできるといいなと思う。

4.終わりに

今年も、ホタル鑑賞会が終わった。子どもたちが放流している桐ケ洞ではホタルはあまり見られなかった。工場の灯りで空が明るく感じられるからだろうか。その代わり、すぐ近くの洞でたくさんの源氏ボタルを見ることができ、児童も親も感動した桐ケ洞周辺では、源氏ボタルの他に平家ボタルや姫ボタルも確認した。いつまでもこの環境が破壊されないようにと願い、自然を大切にすることを子どもたちに伝えていきたい。

ホタルを通しての自然教育　上野武次

（鹿児島県姶良郡加治木町立加治木小学校教諭）

学校や地域にあって、子供達はどういう生活を送り、どういう思いを持って生きているのでしょう。体を動かすことをいやがり、作業、清掃はやろうとしない姿は日常茶飯事です。心のすさみも大きくなっているように思われます。中学校の荒れやいじめは、依然として後を断ちませんし、小学校でもいじめ、万引、窃盗など、一つ出て来ればいもずる式にたくさんの子が指導されています。また、相手が傷つこうがどうだろうが、みくびった言い方や変にこだわった言い方をして、心を痛めている子の何と多いことか。こうした姿は小さな弱い生き物への残酷な対し方として現れています。だからこそ、小さな生き物の生きざまを見せることを通し、命の尊さに気付いて行く自然教育の大事さがあるのではないだろうかと思います。

わたしは、昭和63年宮之城町の佐志小学校で「緑の少年団」の指導にかかわっていました。その子供達がホタルの人工飼育を行うことになり、ホタルと関わり始めました。通勤途中の町の川や用水路を調査して回りました。調べれば調べるほど、自然が残っていないとほたるは育っていないことに気付かされました。そして、県のホタルを育てる会を組織しながら、ホタルを通して、学校や一般の方々とのつきあいが始まりました。

今、鹿児島でホタルを通しての活動は、四つの方法で行われています。

一つは、学校の敷地内に人工飼育施設を作り、そこにカワニナを育て、ホタルを育てる方法です。放虫やホタル祭りと言う形で終わります。ホタルクラブや緑の少年団がその役割を担っています。中山小、笠木小、佐志小など三校がそれです。

二つ目は、人工施設はないけれど、校舎内に発泡スチロールの箱などを準備し、採卵、幼虫飼育を行い、台風後、幼虫の放流を自然のホタル生息場所で行っている学校です。加治木小、田布施小学校がそれです。

３つ目は、今までいなかった団地の人工の川がよごれているのをなんとかならないかとホタルを育て、放流することを地域、ＰＴＡ父母らと協力してやっている地域です。星が峯西小、星が峯東小がそれに当たります。

最後が、学校で採卵、幼虫を育てるが、その幼虫は町観光課の作った人工施設に放流するもので、上場小がそれです。ほかに、自然生息地を守る運動をしている財部町の中谷小の例もあります。

いずれにしても、ホタルという見てきれいな光だけに「育てる」ということをやろうとしています。その中で、自然を大事にすることを学び、生き物の命の大事さも子供達に考えさせようとしています。この中には、いろいろな問題があります。ホタルを育てるには、技術がいります。誰でも簡単にはできないので、今まで担当していた先生が転勤してしまえば、後継者がいなくて、施設が遊んでしまう事態に陥ります。そのため、後継者は「育てる会」に入り、研修することになりますが、育てる会に入ることもなく、熱意がないところでは、ストップしてしまうことになります。ま

た、カワニナを育てることを同時にやっていないところでは、常にカワニナを自然発生地からとってこなければならず、自然発生地のホタルに被害を及ぼしています。

もう一つは、担う子供の問題です。クラブと言う形でやっている学校では、週間一回の活動時間ではなかなか仕事が進まないし、まわされてきた子供は積極的にやろうとしないという問題が発生いします。ホタルを育てることがどういう値打があるのか、新聞、テレビに学校の蛍が出たところでは、自然にも目もむいています。しかし、始めたばかりの学校では、カワニナを育てている箱に汚れた物をいれて、全滅させたり、幼虫をつついてみたり、ポンプを止めたりといたずらが多いです。心の荒れが、弱きものに向けられているのです。

こんど、5、6年生二百名に「自然少年団」結成の呼び掛けを行いました。クラブ形式では、息詰まったので、少年団を作りゴミ拾い、川清掃、自然観察をしようと考えたのです。ところが、ただの一人も希望者がいませんでした。スポーツ少年団、塾、おけいこごとが、忙しいのでしょう。4年生を担任していますが、オープンスペースの所でホタルだけでなく、すずむし、金魚、あずき貝まで育てていますが、4年に働きかけて、自然愛護、環境悪化に対抗して活動しようと思っています。

第25回研究大会雑感

今回の研究大会は九州の長崎県で行われるため、会員の皆様の参加状況が気になっておりましたが、九州はもとより北海道からも参加されまして、参加人数も 120名以上と大会始まって以来の盛況になりました。今大会が成功に終わりましたのは、ひとえに伊良林小学校ホタルの会の皆様のご努力によるもので大変感謝いたしております。

最近はホタルに関して関心が高くなりましたが、第14回情報交換誌に東京の矢島威氏も投稿されていましたとおりホタルをイベントの人集めにのみ利用されることさえ起こっています。地についたホタルを通しての自然環境の保全や自然教育といったことが、本当に必要だと感じられます。ホタルを通しての自然環境の保全や教育を全国各地に展開できるのは本会会員の方々以外にないと考えられます。そういった意味からでも第25回研究大会が教育をテーマとして行われたことは、たいへん有意義な大会だったと思います。

（文責　圓谷）

小城町探訪記

ほたるの里　小城町を訪ねて

全国ホタル研究大会第25回長崎大会のあと、江里口氏らのご好意により数名の会員が佐賀県の小城町を訪れることになった。小城町は佐賀平野の北西、筑紫山地との境にあり、嘉瀬川の支流祇園川が町を流れる。小城町は江戸時代、佐賀・鍋島藩の支藩として鍋島元茂が入部、城下町として栄えた。最初に訪づれた生息地は、公園の一角に水路を整備し、ホタルを放流しているとのことである。ここで地元の方の説明を受けながら水路を廻った。水路は良く整備されており、カワニナもかなりみうけられる。小城には名水百選に選ばれた「清水の滝」などもあり、水が豊かなところのようだ。

その後、公園をあとにして、須賀神社下の駐車場へ移動した。須賀神社は室町時代に千葉氏により京都の祇園神社から勧請された神社で、山の上に社が建っている。駐車場の向かいには小城町の名産のひとつである小城羊羹の店があるが、この羊羹屋は店の隣を資料館にしており、そこを見学することにした。次に全国ホタル研究会の会員でもある、七田氏の酒蔵・天山酒造を案内していただいた。酒造りは冬に行われるため、実際の酒造りは見ることができなかったが、大きなタンクが並ぶ酒蔵には圧倒されてしまった。酒蔵を見学した後、酒造りのビデオを見せていただいた。酒米は酒造りの最初で精米するが、見せていただいた精米済みの酒米はもとの米よりもずいぶん小さくなっていて、酒造りの大変さをかいま見た気がする。酒造りは水と切り離すことはできず、良い酒を造るためには良い水が必要である。このへんに酒造りとホタルの関係があるのかも知れない。蛇足ながら、酒造りをテーマにしたマンガに尾瀬あきら氏の「夏子の酒」という作品がある。現在の農業の問題をはじめとした酒造りを取りまくさまざまな問題を扱っていてなかなか面白い作品である。興味あるひとは一読を。

閑話休題。七田氏の所を失礼し、祇園川を上流に走って行く。祇園川は天山の伏流水を集めて流れる川であるが、途中の川の両岸にはあまり樹木がなく、ホタルは昼間どこにいるのだろうかという疑問が浮かんだ。川は一面をヨシが覆い、水路がほとんど見られなくなっている。おそらく昔は、洪水が発生することで土砂が掻き回され、ヨシの繁茂がある程度押えられていたが、現在はダムにより水量が一定に保たれているためであろう。車を降りて川沿いにしばらく歩くとホタル飼育場がある。このホタル飼育場は川から歩道をはさんで設けられている。水路はあまり長くないが水はやはり豊富である。

ホタル飼育場の見学の後、しばし休息の後皆さんと夕食をとる。夕食には鯉の洗いが出されたが、しばらく清水に泳がした鯉は身がしまって、泥臭さがなくとたも美味しかった。夕食後、いよいよゲンジボタルの見学に出発する。長崎もそうだったが、小城町など九州の発生地は夕食後でも十分間に合うというのが不思議な感じがする。筆者の住む横浜ではゲンジボタルの活動時間はちょうど夕食時で、調査を終える頃にはお腹がペコペコになっている。車に乗るとまずホタル飼育場付近ま

で行く。ゲンジボタルは祇園川上流のダムのすぐ下から発生しだす。小城のゲンジボタルはもちろん西日本型で、筆者の見慣れているゲンジボタルより発光間隔が短く、せわしない感じがするが、数の多さには圧倒される。ホタル飼育場周辺でしばらく観察した後、車で途中何カ所か止まりながら須賀神社の駐車場まで行く。つまり祇園川のダム下から町まで延々と発生地が続いているというわけである。駐車場周辺は多くの人出で賑わい、屋台が並んでいる。こういう光景は横浜では見られない。見学者は地元・小城の人ばかりでなく、佐賀や遠く福岡県などからも来るという。それだけ小城のホタルが広く知られているということであろう。筆者は九州のゲンジボタルを見るのは初めてというわけではない。しかし、そけぞれに地域の特性というものがうかがえて大変興味深い。今後もそれぞれの地域特性を活かした「ホタルの里づくり」を行っていって欲しいものである。

最後に、今回の小城町訪問にさいしお世話になった、江里口氏をはじめとする小城町の方々、ならびに長崎市の伊良林ホタルの会の方々に厚くお礼申し上げます。　（文責　後藤　好正）